1

私の持っている最後の記憶は、酷く現実離れしたものである。

私はその時、ふたりの男と廃屋の奥座敷に居た。

ひとりは淵脇と云う名の若い警官である。もうひとりは堂島と名乗る五十がらみの男で、職業は善く判らない。郷土史家だと云っていたようにも思う。

場所は伊豆の韮山から道なき道を分け入った山の中である。日付けは――私の記憶に間違いがなかったならば――六月十日だった筈である。六月四日に伊豆に入ったのは確実だし、六日間を取材に費やしたのだから、その勘定で間違いはないだろう。

ここは、まるで――。

まるで異空間だ――。

淵脇が独り言のようにそう呟いたのを、私はやけに明瞭に憶えている。慥かに異空間だと、私もそう思った。それ程奇異な状況下ではあったのだ。だからと云ってそこは、理不尽に摩訶不思議な場所だった訳ではない。不条理な不文律に支配されていた訳でもない。

それでも――その時、私は異空間の中に居た。

他に適当な言葉は見当たらなかった。

異空間――。

異空間と云う言葉は、甚だいい加減な言葉だと思う。平たく読めば異なった空間と云う意味なのだろうが、何と如何異なっているのか判然としない。先ず空間と云う単語からして一筋縄では行かない。最近でこそ当たり前のように耳にするようになったものの、本来は日常的な会話に登場するような単語ではなかった筈だ。術語として限定的に使用される場合以外は語義が複層的で如何とでも取れる。言い換えに過当な大和言葉も見当たらぬ。その『空間』に『異』を冠して、それで平然と意味が通じるのだから言葉と云うのは不思議なものである。

これは、厳密な語義を置き去りにして語感だけで罷り通る言葉なのだ。亜空間だとか異次元だとか、同じような言葉はある。言葉は生き物だから、故事来歴を持った由緒正しき言葉でも、民意に沿ったものでなければ死語となるし、反対に仮令歴史的学問的に整合性のない造語であっても、その時代の要求に合致すれば十二分に機能する。

異空間や異次元は言葉として有効だったのだろう。

斯様な語群が定着した理由としては、矢張り先ず空想科学譚の一般への普及が挙げられるだろう。

学術用語を学問以外の言説に転用したと云う意味合いでは、科学技術の進歩発展以上に、娯楽小説の影響力は大である。但し、用語の厳密な意味や概念は、その際に多く失われてしまったのだが。

ただ、一方で定義を曖昧にしたからこそ生き残った――と云う見方も成り立つだろう。例えば、我我は狭義の異空間を体感することは絶対に不可能である。多分、未来永劫――。

縦んば理論上可能とされたところで、現実問題として私達は私達の存在する空間から私達の存在し得ない別の空間へと踏み込むことは出来ないだろう。

しかし定義されていないが故に――。

私達は、まま異空間を垣間見ることがある。

勿論それは取り立てて不可思議な空間ではない。

徒に奇景絶景を求めるまでもなく、旅先の普通の町並みや、普段通らぬ路地裏などにもそれは容易に顕現する。のみならず、見慣れた部屋の片隅にも、花瓶の底にも、異空間はある。それは、ほんの僅かな差異で齎されるのだ。

光の加減、灰かな香、微かな温度差――。

否、そんなものすら必要ない。単に視る角度を変えただけで世界は一変することがあるのだから。月並みな云い方をすれば、異空間は己の中にあるのだ。

だから人は常に、居乍らにして旅人たり得るのである。

そうならば――私はその微昏い穴蔵のような小部屋の中で、己の中を旅していたのかもしれぬ。だから。

そこに転がっていたのが本当に死骸だったのかどうか――。

だから私は断定することが出来ない。

あれは――。

発端は五月の下旬だった。

その日は卯の花曇りの、不愉快な天気だったように思う。

まだ陽は高いと云うのに室内はどんよりと濁っていて、一向明瞭しない。電燈を点してみてもその濁りは取れず、却って黄ばんだ感じがして、そこがまた不愉快だった。

その日私は、気温の所為か湿度の所為か、いつにも増して寝起きが悪かったのだ。

起きて暫くは使い物にならず、顔を洗っても口を漱いでもさっぱり効果はなく、いざ仕事せん――と必要以上に気負って万年筆を握ってみても、指先は弛緩し目は翳み、まるで集中出来なかったように記憶している。

要するにその日の不調は天候等の外的要因に由来するものではなく、凡ては私の内部の問題だったのだろう。体調が――特に頭の調子が悪かったのだ。

勤め人ならば否応なしに決まった時間に家を出ざるを得ないし、都電の混雑にひと揉まれでもすればまあ復調するのだろうと思う。

回復せずとも移動することで嫌でもモードは切り替わる。替わらなくとも仕事場に居るだけで取り敢えず格好は付く。

しかし私のように、ただのんべんだらりと抑揚のない生活を送っている自由業の場合はそうは行かない。不自由あっての自由である。拘束なき解放はあり得ない訳で、他律的支配を受けぬ身である以上、自由を獲得しようと思えば一切を自律に任せるしかない。

その場合、己に伸しかかる重圧には圧倒的なものがある。

自由業とは名ばかりなのだ。

自堕落な人間にとって己を御すことは駿馬に跨がるより遥かに難しい。

深く、長い溜め息を吐いた。

徒に机に向かっていたところで仮名の一文字も書けはしない。原稿用紙はいつまでも新のままで、その膨大な数の升目が埋まることなど、永遠にないように思えた。

私は文机に肘を突き、手の甲に顎を載せて、窓の外を眺めた。

窓硝子の表面には塵や挨が層を成しており、恰も磨り硝子の如きである。

そこから覗く、まるで代わり映えのしない隣家の庭の暈けた風景に薄朦朧と映り込む己の面を重ねて――そうして、私はかなり長い間、忘我の状態で居たように思う。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。